

「とよなか学習応援団」って？

二〇一〇年度の補正予算が九月から執行されます。

その中のひとつに、「とよなか学習応援団」があります。これは、豊中市での教員をめざす大中学生を、全小学校に配置し、各学校の学力・学習状況の課題に応じて、教

員の指導補助にあたり、児童の学力向上に資するという趣旨の事業です。時給一〇〇〇円で、週八時間、二〇週（九月から三月）という条件です。

市教委は、「人不足に對する学校現場への応援」と言っていますが、果たしてそうでしょうか。

第一に、わずか週八時間の勤務では、何をどう補助してもらえるか疑問です。学校現場には、すでにジュニアメイトや単

位をとるための学生、ボランティアなど、いろいろな名目で、大学生が入っています。その学生たちに有効に活動してもらうためには、こまかい打ちあわせが必要ですが、そのための時間がなかなかとれないのが現状です。

第二に、「計画書」や「報告書」など、書類の提出が煩雑です。これらは、管理職の仕事ですが、管理職の事務量が増えると、休んだ担任の補欠や、緊急事態にすみやかに対応できないことになります。

現場の教員の間では、「学生さんを指導しなければならぬが、その時間がない。」「短い期間ではなく、長くこともたちに関わってもらいたい。」「退職者など『経験のある教員』の

援助があると助かる。」という声が出ています。

現場の忙しさに対して、何とかしようという市教委の姿勢は評価できるものの、大切なことは、正規の教職員を増やすことです。そして長期にわたって責任をもち、一緒に学校づくりをすすめていける人が必要です。



2010年9月13日
NO. 456

〒561-0874
豊中市長興寺南3-5-2
TEL (06) 6865-3190 FAX (06) 6865-3191
Eメール zenkyo-toyonaka@tcct.zaq.ne.jp
Webページ
<http://www.tcct.zaq.ne.jp/zenkyo-toyonaka/>

とよなか

全教豊中教職員組合

「とにかく会議を減らせ！学年会を減らせ！」 という校長が増えているのはなぜなのか・・・

新学期が始まり、組合の会議で、ある職場から「校長から『行事予定表から学年を削れ』と言われた・・・」という報告があり、それに続いて別な職場からも「『とにかく会議を減らせ！』とだいぶきつく校長から言われた。」という発言がありました。

「勤務時間適正化」の下の下に、会議の削減を迫る市教委の姿勢を反映したもの

学校現場が超多忙で長時間超過労働が常態化している下で、組合は教育委員会に「勤務実態調査の実施」「法にもとづく定数にみあった教職員配置」「事務報告

文書が多い状態の改善」

「削減された旅費の復活」

「非常勤職員の賃金、労働

条件の改善」「非常勤特別

嘱託員制度の復活」「『同

和』を特別扱いした施策の

中止」「評価・育成システ

ムの即時中止」「首席・指

導教諭など『新たな職』の

配置の中止」「職員が希望

もしていない研究指定の見

直し」「特色づくりで学校

予算に差をつけるやり方の

中止」「日直当番の廃止」

「クラブ指導の見直し」な

ど勤務・労働条件に関する

提案と改善の方向を示し、

多忙化に結びつく問題が発

生するたびに教育委員会と

折衝・交渉を行ってきた。

こうした中で豊中市教育

委員会は勤務時間適正化委

員会を発足させ、今年の3

月には「労働時間適正化プ

ラン」以下、「プラン」

をまとめました。

現在、各職場で言われて

いる「会議の削減」はプラ

ンに基づき、校長が教育委

員会の強い指導の下に出し

てきているのです。

市教委は多忙化の解消に向けて、根本問題の解決に尽力を！

プランの中で市教委は

「市教委が独自に実施して

いる調査・照会・提出書類

について、簡素化・見直し・

廃止できるものを洗い出す。」

「『本務外労働の廃止』・・・

教員におこなわせている給

食業務を見直す・・・連

合運動会、連合水泳大会、

球技大会について」などと

して、すでに実施に移され

ているものもあります。

しかし、学校現場は、教

育委員会主導で行われてき

た「研究指定」「特色づく

り」「ポランティア体験」

「職場体験」「地域連携」

等のために準備や打ち合わ

せの時間が増え、「旅費削

減」のために「日帰りで

宿泊行事の下見を実施」

等の学校もでてきたので

す。さらに「評価・育成

システム」「首席・指導

教諭」導入による管理と競

争が多忙化に拍車をかけて

います。

市教委は多忙化を招いて

いる教育現場がかかえる根

本問題に目を向けて改善に

向けて尽力すべきです。



原爆投下から65年のヒロシマへ

東豊中小学校 佐伯知香

昨年、長崎大会で初めて原水爆禁止世界大会に参加しました。原水爆禁止に向けてのさまざまな取り組みや思いを知り、「来年は必ず広島に行こう。」と決めています。今年は、原爆が投下されてから65年

です。一日目の開会総会には、7400人も人が参加していました。熱気に包まれた開会総会の後は、青年交流会に参加しました。「Ring! Link! ZER O」ひびかせよう つなげよう 核兵器ゼロへの思い」をスローガンに、全国各地から、そして海外からも含め、1000人以上の青年が集まりました。

北海道から何カ月もかけて広島まで歩いてきた青年、沖縄から基地問題への思いを抱えて学びに来た高校生など、学生や社会人、それぞれの立場でのさまざまな活動の様子や、ふだんから感じていたことなどを交流しました。参加者からは「みんなそれぞれの生活がある。そんな中でも、1分でもできることからやる。それが周りに広がっていくば・・・」「どんなに小さくても続けることで変えられる。気持ち揺るがないことが大切。」などの意見が出されました。

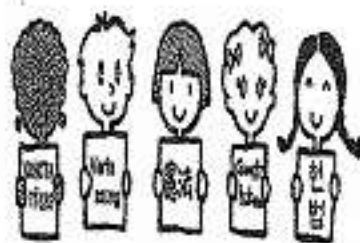
二日目は、碑めぐりの分科会に参加しました。猛暑の中、ガイドさんに案内していただき、ヒロシマを歩き、感じる事ができました。慰霊碑の前で手を合わせたときには、涙がこみ上げてきました。

教職員平和のつどいにも参加しました。ニューヨークの高校教師キム・アレン先生に、平和教育の実践を報告していただきました。アメリカのこどもたちは、一九四五年八月に広島で何が起こったのか、学ぶ機会があまりありません。「原爆投下は、戦争終結のための正しいことであつた。」と教えられることが多いそうです。しかし、キム先生は原爆投下の被害など、真相を学ばせる授業を実践されています。それにより、生徒たちは、実際日本に来て核兵器廃絶を求める署名を集めたり、政府に向けて手紙を書いたり、「自分たちにできること」を実行しているそうです。キム先生は、「生徒たちが正しい行動をできるように考えていくべき。そのことが、政府をも動かすことができる」と

信じている。」とおっしゃっていました。事実を学ぶことの大切さを改めて感じ、学ぶ機会をつくる私たち教師の責任を痛感しました。

三日目には、平和祈念式典に参加しました。国連事務総長のあいさつや、駐日アメリカ大使が参列していたことから、核兵器廃絶に向けての世界的な大きな波がおこっているのは間違いないありません。

三日間を通して、どんなに小さなことでも、自分ができる一歩を踏み出すこと、大切さを強く感じました。自分にできることを探し、学び、行動していきたいです。



全教豊能ブロック

教育研究集会

8月28日、豊中市市民会館で、豊能ブロック夏期教研がありました。

オープニングは、恒例となった劇団ドラえもん劇「わたしのクラスはごんた村！」新任先生がんばり日記。新任ならではのあつたるネタには温かい笑いが。

記念講演

は、絵本作家の長谷川義史さん。次々と描かれる、ライブ紙芝居。

「何気なく描かれる絵のひとつひとつがとても素敵で話をされる長谷川さんの雰囲気そのものだと感じました。」（箕輪小 女性）
「『いいから いいから』

すごく優しくなれる言葉ですね。私も自分でいっぱいいっぱいになってしまいう時、この言葉を自分に唱えてみたいと思いました。うまいものうた、ぜひ実践したいと思います!!」

（緑地小 女性）

「絵本を読んで、子どもたちが笑っているところを想像し、はやく、子どもたちに会いたいなあと思うました。幼稚園BLUESもステキでした。」

（箕面市立豊川南小 女性）

など、多くの感想をいただきました。

午後からは7つの分科会と6つの実技講座、

『群読の基礎』講座。

「子どもたちの声の持つ力や群読の楽しさを学ばせていただきました。2学期にぜひ、やってみます。」



『学級通信』講座。「クラスを強く結びつける大切な役割をしていることを強く感じました。」

『HIPHOPダンス講座』には「来年もぜひやってほしい。」との参加者の声が集まりました。

